西洋新書 五編 下

特31
671
一冊 二架 三四
十四本の八

特31
671

西洋新書五編卷之下

東京　瓜生政和　編集

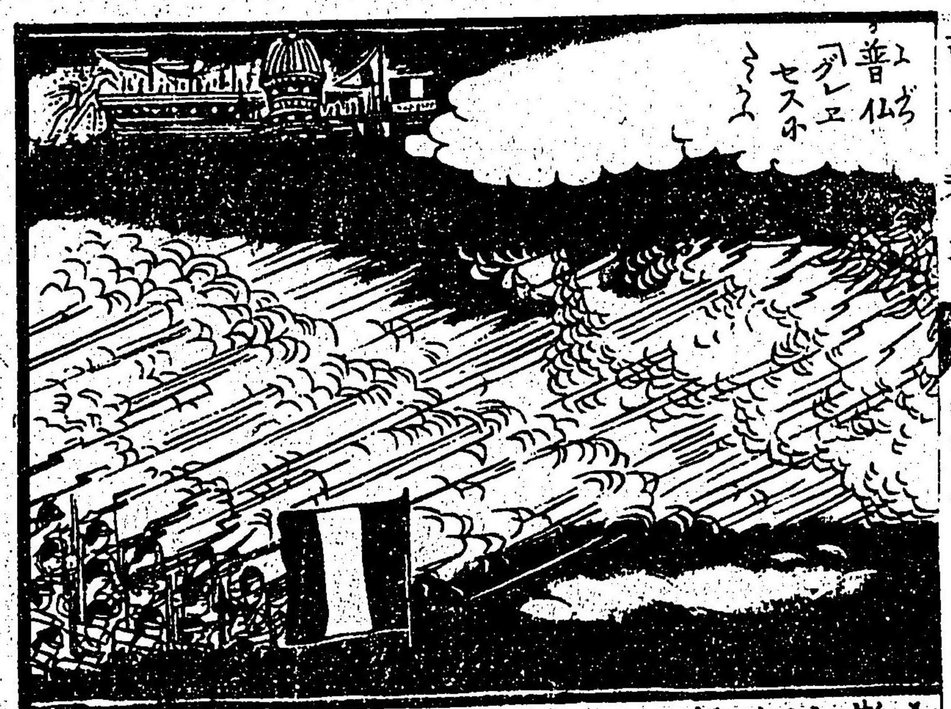
○西洋紀元一千八百七十一年八月二日を手始めとして普仏の両軍兵を接すること屢み至り仏軍戰ふ毎に利をとらーるひ一日もまもなく進擊ーし同月十二日軍陣あとをさうまるとを以て普軍まもなく進擊ーし同月十二日まもなみ「ナンアレー」縣より東の方の仏領既に普軍の有となり「ストラスフルク」縣「オビ子ル」縣「シユニーブル」縣の三縣通路止りなり爰に於て仏帝拿破崙をとどめ全軍總督「マルシヤルバ

ゼオン先鋒總督マレシヤル。マクマオン等る普軍の銃勢容易
ならざるを知りたり始め二日の戰ひ先陣ドウエーグ兵士兵粮
をつひ水泳ぎなどの油斷より破きの基ひを引出せしを以て此程
い諸方の隊列より兵を出し近隣を巡邏まること厳重なり亦普
国みそへ始めより士卒を分ちて四辺の見まはり紙堅固ふ為しる
故今日まそみ両軍の邏卒モセルと呼ぶ山間みそ往あひ戰爭と
なり又ホンタモークンと云ふ所まても普仏の見まはり出合ひ
頭の軍を始め勝負まちくくなる中ふマルゲツトの地まそハ普
の斥候兵仏の騎兵隊の巡邏ふ往あひ三十人ばかり生捕とる
りたり斯諸方ふ小ぜり合ひあをべ昼夜砲声止むことなし仏

蘭西先鋒の総督マレシヤル。マクマオンい如何ふもしそ普魯士勢と
来因河の彼方まで追戻さんと思ひ計り同十三日すぐふ出兵
るさんとなるとき普国の公子フレデリツキ。シヤルー索孫侯アル
ルペルドなど大軍を持ひ来もりとの注進あをべマクマオ
ンハ我が隊下なる三万三千の兵を従ぐ敵ふ出あふとろまで
もく頻りふ道を急がせしひとき普の公子フレデリツキ
シヤルー大将索孫侯アルベルドハ十六万の兵を率しー仏の
本営メツス城を攻落さんと喇叭を鳴しー陣鼓を打さて勇威
を示しそ伐入り来り半途ふて普の先陣マクマオンが先
手の兵と往あひ早矢あらせの軍をまり対方とも次第

ふ列と操出して終ふ総軍の打合ひとなり仏軍い小勢なるとも
数度の恥辱と雪んとすれば必死の勇力数人ふ敵し普の方い
大軍のくるらず勝誇りくる兵なるゆえ只一トふ揉くふ押崩さん
と先と争ひ侵撃す然れども双方より劇射する大小の砲声天
地ふ裏き山谷ふ震ひ遠くとも聞ふ高嶺爆発の震動の
ごとく或ひい豆と熬る音の如し勝劣と分さざること三時間ふ
おびしぶ仏軍すてふ弾薬つきくり爰ふ於て「マクマオン」
指揮るし自らう銃鎗と振つて先ふ進み普魯士勢へ突
入りけるとば総軍残らず続いて突入り暫時普軍と追ひる
びけり普魯士方い大勢なるゆえ逃る味方ふ入れ代り

砲と止めと是もまた銃鎗と捻つて突かり総軍やく接戦とと
そ成りくるるに爰ふ於てかつ返しつ倍勝員足えざりしが
仏軍い続く味方なく普軍い新手と入れ久伐ゆえ時の移るふ
ちさらずて仏軍やうやく餓とかえ力ようり腕撓め普軍と
ぞと一齊ふ政立ると急るまば仏蘂西の陣列さぶふ潰へ終
ふ破れて散乱しまて大敗とぞるうくる爰ふ於て普魯士
勢いいよく深く進み入りすぐふ「メッスの近方へすき間もあら
ず陣とり斯の如くるまば来因河の枝流なる「モセル河の
彼方ふ陣取居る仏蘂西全軍の総督「マレシャル」バセインい
「メッス城と「モセル河の間へ敵侵入し後方を取ちるとば



難戈なるんとす。総軍十二万を督し十三日の夜中ふ陣営を引きらひ隊列追々「グールセスの地より河を渡し暁三時ふ」全軍のうち水を越るる者半端なるとり普軍ちやくらふ爭を知り普の太子「フレデリッキ。シャルーキ。維廉「フレデリッキ。シャルー等の人々軍卒数万を挙ひ疾風の落し来るが如く押かるふ

仏蘭西の総督「マレシャル、バセインも豫て斯あらんと推し居るが少しも疑礙せずあるふ全軍ふ令を傳へ備へを固めんとふ對しるく内ふちや大激戦とるるる然ともとき夜らるる暗けるが両軍ともふ兵隊の運動自在をえず因り少しく宥豫をり東方やうやく明るんとするふ及び双方の陣営数里ふつらるるて判然と見えざるる抑らの戦地い「メッス城を離るる三一里を出ざる故普軍い天暗きるちふ仏軍を討破らんとるるるふ案外ふ間どる時刻をくるるるが「メッス城より是を望むふ歇味方の旗印朝靄のるる間ふあらるるを出ると以て何ら猶豫なすべき臺場ふ仕掛し「ミトライユー

スの大炮と普軍の隊中へ間隙なく打出し〳〵爰ふかいて普魯士勢い仏将「マレシヤル。バセインと「メツスの臺場の間ふ陥り やうやく苦戦とすり〳〵まで「フレデリツキ。雑黨「フレデリツキ。シヤルーるど血気盛んの若大将なるもべ少しも屈せず兵と両面ふ ふり分けて「メツスの臺場と「マレシヤル。バセインが陣営へ数門の大砲小銃を劇射なすと雖ども「メツスの城中より打らぶ千砲丸矢ごろ宜けもべ是が為ふ斃さるるの数を知らず加ふるふ前軍「バセインが陣列も勢ひたるるが猛る故勝べうらざる事を計り戦争四時間ふして朝第七時辛く総軍勢を引あげ〳〵仏将「バセインも追討て勝

利なしがきを思ひその侭総軍を督し「メツス城ふぞ入〳〵けるに軍普の兵「メツス城と仏将「マレシヤル。バセインが中間ふたさまを大らふ損亡なすとなども後陣の大軍なれ後より追々侵入し勢ひたるが猛るまべ銃気當らざるを計り其日午後第二時仏帝拿破崙い當城中ふるれ護衛の兵を止め太子と共ふ西北の方へ十里餘りを隔てくる「ウエルジユム縣ふぞ引あげくる斯の如くまべ普軍まもなく威を震ひ〳〵もち一隊の騎兵ら「メツス縣郭外の市中へ乱入し仏蘭西〳〵先鋒の兵粮貯へ〳〵あるを奪ひ〳〵まで一軍の兵隊い仏蘭西勢が「バタイロンふて屯た〳〵

る「ポンクムウーワンの地ゐ走むゑーゐ仏兵一砲とも放さず輜重を捨て逃げさまり爰ゐ於て進んで「ナンシー」縣の仏軍ゐ向ひーゐちの敵もまゝ逃去りけまど普の騎兵ら縣内の市街ゐかりる鋏道を破却ー捨てりまゝ一軍の普兵い「ツール」縣を攻撃んと進ミーゐ仏軍の騎兵やゝ「ツール」縣より伐て出で半途ゐ於て戦争たゞまり双方死傷両三人ゐて日暮れまゝば物分をとる同時ゐ「ガルド」モビルと云ふ地ゐて普仏の歩兵隊ら戦争ゐかゞび双方の勢ひ盛んゐて両軍とも死傷そゝくゐらりり是ゐ日暮て物をとるぬ斯諸方の戦争らる普魯士ゞまり仕掛りとろゐーて攻撃の

烈ーきとなるべー

此日仏都巴黎斯ゐて独ひ国より来り當府下ゐ在留る居る人民二日のうちゐ皆ひき拂ふべーと命ド通例の道すぢい尽く戦地となりーゆゑ一ツい白耳義国一ツい瑞士国への二路の鋏道より退くべー蓋ー鋏道の蒸気車料い並の半金でをふべーとありけまども独ひ国へ退くりの残らず本賃銭を拂ひ往ーとるん

又普魯士の首都伯靈ゐてい普王の皇后「ヲーグスタ」自身いゞ「ひ」ゞ生捕ゐるる仏の将士兵卒等の食糧ゐるひい疵養生るどゐ厚く心をつけまゝ衣服おゝび

必要の諸品とあらゆる其世話をねんごろに懇切なり愛ふかくして伯靈府下ふ住居する婦人の社中より仏蘭西の生捕をあまたまで酒、麥酒、茶、茄菲、煙草とうの品々を送るとうぞ

さるほどふ同十五日夜らまだ明きらざるふ普魯士公子フレデリツキ、シャルー索孫侯「アルペルト」と大将として仏帝ーく「ウエルジユムの城ふも足を止させず速ふ是を陷まんとて既ふ「ウエルジユムより二里半ほど隔てー地まで攻めとり愛ふ於て仏蘭西先鋒総督「マレシャル、マクマオン」ゼ子ラアル、ベーリーなど云る大将兵を指ひく是を迎へ既ふ炮発すとうるとき時「ナンシー縣の方より仏蘭西全軍

の総督「マレシャル、バゼイン」討てい「ナンシー縣と「メツス縣の中間ふーて普の先鋒隊と合戦始まりとの手の争ひとふ烈ーく双方より打出す乗丸い小夜あさまる、木拈ふ霰ーる如くあと面を向くべきやうもるー然もど両軍ともせず血戦時を移すうち仏軍の旗の手おひ〳〵進ミ並普軍次第ふあとざさりして「メツス城ちくまで思えず退ぞきとりけるば「メツスの仏兵ことと見てまく砲臺の上ふ備へー ミトラユースの大炮と打出せば是ぞ為ふ普兵ふくびー悩まさるの斃るるの数と知ずず暫時ぞもどい血戦るすも終ふ敗走ーて退ぞけば「ウエルジユムのくへ向ひー普兵も共ふまくー伐やぶらるとと散乱るーて引あげ

今日の戰爭普軍の損亡するもの多く討死二万八千人生捕るもの五千人と聞えける爰ふかの普軍一たび南方の陣々へ引あげ〳〵まづ「マレシヤル」バセインゴ名大いふ震へり然るに十六日曉三時のころ「バルシユツク」縣の急報到来し今朝普軍の模樣とさぐらするふ彼の甲冑騎兵隊多人数「コンメルシー」の地と発し當縣へ乱入の〳〵ものなり故ふ早く鉄道と破却しすてぬ以用心あり〳〵然るべしとなりけるに拿破崙かふ此両三度の戰爭味方勝利と得たり〳〵ふ普軍をも屈せず斯深く侵入なさんとあるは其源因の勢ひ〳〵強大なり容易ふ當るべからず然るふ此「ウエルジユ

ム縣い大敵を引うけ戰爭なすの地ふあらず一まづ「シヤロンの城」ふ退ぞき事と計らんふ如ずと決し「ウエルジユムの城」い守りと止め再度西北の方へ三十四五里と隔へる「シヤロンの城」へぞ引揚る爰ふまづ普魯士がふかの十三日十五日の敗軍い皆仏兵らが「メツス城」ふ據りく大炮と打のぐせしふ有り

「メツス城」とそのまゝ置くハ味方のためハ大害なり早く是と落陽を
く敵の足溜うと拂ふんゆへ知ずと決し普の公子「フレデリツキ」シ
ヤルー索克孫侯「アルベルド」と総督して「ゼ子ラル」トウリング
「ゼ子ラル」ウエデル「ゼ子ラル」グリウセル「ゼ子ラル」ワンローチなどの諸
大将兵士十五万と督して「メツス城」駐むゝり此事を普く仏
蘭西方ハ聞えけるゝべ仏莱西の大将「ゼ子ラル」ラドミロール「ゼ
子ラル」グランド「ゼ子ラル」モンタイジウなど云る者総兵四万と
引従ゞ「メツス縣」外へ伐くゞ要地ハ據りくゞ陣ゞる
普軍ハ今日こそ是非とも「メツス城」を攻落さんと思ひ
るゝべ彼の十五万の大兵潮の湧ゞ如さらひて推かゝ

来る仏軍ハ小勢なるゝ度々の敗北ハ手ゝ切なる故絶所を撰く
く備へと立「メツス城」とさゝんで是を討んと構えゝ然る普
軍ハ兵を進め頻りハ競ひかゝるとゝども仏軍更ハ応ずず
只要地より「ミトラユースの大砲」を掛く打ゞ「メツス城」
の炮臺ゝもゝ「ミトラユース」を打出してその烈しきを雨
の如し普魯士勢ハかゝて期しゝるゝるべゝその弾丸を物とも
せず「ゼ子ラル」ドウリング「ゼ子ラル」ウエデルなど云ふ大将まゝ
ハ進み厳しく指揮して普軍ゝも数百挺の大炮「ミトラユース」
を打かけゝゝ因りくて暫時のあひだハ大激戦とゝり双方
合せて二十万餘の兵卒必死と究め発炮すゝべその響き其

煙りかひぐーきるど云ふだぐりかーぐ然ととも仏軍ハ要害ふそるへ普軍ハ勇気ふもつせて理ふとと落陥んとする故仏軍ふ比較くハ普軍の方手負ひ討死えるりぐ多く旗の手やうやく乱ると窺ひ仏蘭西方右翼の先鋒る「ゼ子ラル・ラドミロールと云ふ大将七十三番隊の「バタイロン兵」と以て普軍の騎兵大隊へ討入りくり普軍騎兵の大将ハ索克孫侯「アルベルドるりるが是と見て敵軍兵と進めるこそ僥倖ると武まり撃くづせとて頻りふ下知と傳ゆるとど仏軍の勢ひ猛ふして普軍の騎兵いろめきかけ纏まりねば索克孫侯「アルベルド大らふ怒り自身まっさきふ進て仏蘭西勢へかけ入り

て蹂破らんとみーくりふ仏軍より打ぐ千一弾丸の雨きの下ふ索克孫侯「アルベルドハ馬より落て敢るく死ーくり武人ハ是普魯士王維廉の兄ふして齢ひすぐふ六十ふあるまとど勇気るれ衆ふ勝ま獨ひ各國まる墺地利との戦争ふも数度武勇とあらーくびも武くく仏蘭西勢と破り勢ひ盛大るりるが時来ってこの戦場ふ命終りーハ普軍ふ於て最も惜ーき人るりるり然まど只さへ乱ととかけるる普軍の騎兵大将討ものて何ら耐へん雪下とついて敗走す斯の如くるまび普軍ふ総崩ととるり仏軍大らふ勝利と得て黄昏ふらくり戦争やくくり武日の合戦普軍大将の討死索克孫侯

アルペルド「ゼ子ラル」ドウリング「ゼ子ラル」ウヱデル」とふく「ゼ子ラル」グリウセル「ゼ子ラル」ワンローチの両将ハ手負とるゝ総軍の討死手負の数一万八千乃至二万或ひハ三万ホ至ると云ふ仏蘭西ぐゝわゝ大将「ゼ子ラル」グランド討死「ゼ子ラル」モンタイジウハ行方知れず総軍の討死手負普軍ホ此技くハゝどゝホーと二三千人と出ずとたん今日の戦争仏軍の討死ホかゝ兵寡の差ひあるとハ仏軍ハ「メツス」城の臺場ホまゝ或ひハ要害の地と占て大炮および数門の「ミトライユース」を備へ手配り十分ホ整ひ普軍ハ是ホ反ー強て「メツス」城を落陷んと亟理る軍を仕掛ゑ謀ホ戦ひをいどミ」連日の勝利ホ大将兵卒とも少ー く心奢まるゆゑとぞ爰ホ於て普軍の大元帥「ビスマルク」ハ総軍ホ令を出ーて大ゝホ将卒の驕慢をゝ」ーめ軍陣の出入を厳ホすることまぞホ倍ー」ゝ仏帝拿破崙ハこのごろホ至り味方の軍威すこ ー く色と直すホかゝべハ拠會中ゝ や く 至もり狂ことを励まさんとて馬ホ騎ー自身「シャロン」内外る諸方の軍備を巡見ーゝる

ふ將士らこれを帝ふ迫り進んで戰ふことを希望めり
蓋拿破崙が巡見するふ至り將士の進み鬪ふことのぞみ
今日仏國將帥の規則きまり巴黎斯府の事務および府内防
禦の総裁職ハ「ゼ子ラル」ドロシュるものこれを司りまた城郭
外軍中の総裁職ハ「マレシャル」バセーン及び「マレシャル」マクマオ
ンの二將るり然るに仏國中數百人の「ゼ子ラル」有も今日仏の
総軍を率ひ出て戰ふの命令いまこの二將の方すふ出づまた
入りて府内の城郭を警備し巴黎斯の万緒ふ預るものを
「ゼ子ラル」ドロシュるり故ふ仏帝すら総軍の指揮を掌る
を能ずして総て「バセーン」「マクマオン」の二將をして総裁せ

めるるるり愛を以て今帝の巡見のときふ臨み「バセオ
ン」「マクマオン」らが戰爭の仕方を鈍しと思ふ將卒ら帝ふ
迫りて進み鬪ふことを希ひしハ勇気さんるふ似ることも
ども人心の一和せざるり斯の如きの事ふ至るが是その
普軍と鬪ひて屢破る源因るり
爰ふまた仏蘭西先鋒総督「マレシャル」マクマオンハ仏帝「シャ
ロン」へ引揚げるが自已も二万七千の兵を督し「シャロン」の營ふ
程ちかき「カンドンヤル」の地まで退ぞきその所ふ本陣を居り
拿破崙が旗本の護衛かそへ「マクマオン」が援兵ふ備へる
將卒を今手破崙今日づから点檢するふ

一「ゼ子ラアル」ベーリーゞ督する兵　四万人
一「ゼ子ラアル」ヘリキスドウエーゞ督する兵　三万人
一「ゼ子ラアル」ヒノアーゞ督する兵　七万人
一「マレシヤル」マクマオンゞ督する兵　二万七千人
合計十六万七千人其外
「マレシヤル」バセーンゞ督する兵　十三万人
総軍合して二十九万七千人とぞ記して
此時仏都巴黎斯ゟ全國の軍勢を算計するゟ戦
場ゟあるゝ外各地の要害ゟ配るところの兵三十
五万人ゟ二十五歳ゟ三十五歳までの市兵と成

べき者と算るゟ一百四十万人ゟ及ふと云ふ
ゟ同日巴黎斯ゟて「オムニビユス」社中の者
「オムニビユス」と云へる市中往来の人と乗合ひゟて乗せる
馬車の事なり
今般の軍巴黎斯府外の十七城ゟ於て防禦るすべき拠ゟ
あらんも計りがたくて砲臺の修理造営を始めゝゟ運
送るべき諸用便のため千五百疋の馬を献せんことを願ひ出
せり因りて内務全權「ゼ子ラアル」ドロシユことを許容して即日
往来乗合の馬車會社より千五百疋の馬を外郭ぞう
築の運送ゟ出せりとなん

再説普魯士がゝ諸路より兵を押すめて深く仏國へ撃入るとゝくども両三度の戦争將卒多くうち死ー敢るく敗を取りる故諸軍ともお心阿へ今日ハ是非お仏軍を討やぶらんとて普國の太子「フレデリッキ維廉」「ゼ子ラルステンメッス」を総將副將として全軍十五万十七日朝第九時「ギオンウイル」の地より侵撃す仏軍ことを聞き「ゼ子ラルホルトン」る者騎兵大隊と総督ー「ゼ子ラル」「プロサル」「ゼ子ラルバタイユ」るど云ふ大將歩兵大隊とひらて「ズークール」と云ふとろう進ミろう普國の太子「フレデリッキ維廉」ハ仏將「ゼ子ラル」「ホルトン」ゞ騎兵大隊と「ゼ子ラル」「フルサル」ゞ歩兵大隊と撃

やぶらんと直ちお是お分かう「ズークール」の地と「ギオンウイル」の地の中わどお両軍すぐお兵を接ー大激戦とど成りろる普魯士がゝ両三度の敗軍と一挙お償ひ埋んとあく勢ひとお猛烈なるど仏蘭西ぜひも二三目前ろう少ーく戦力ってお似ることど軍陳おひく尻込ー全勝を得ーと云ふあらねば如何お

と普軍と追戻し掠めらるる領地を復さんとゐるべとも
ま〻勇気盛大ゐて実ゐ牛角の戦力なるゆゑ両軍打る
るとも斃るるとも一歩も引ず争闘次第ゐ劇烈なり
此時普の公子「フレデリッキ」シャルーハ一軍を率ひて急ゐ
仏蘭西の左翼なる「ゼ子ラアル」バタイユが隊へ撃かゝる勢ひ大
山の崩るを落るが如くなり是とゑて「バタイユ」も兵を進め一世
の力と此処ゐ尽し其の當るをそるべき剛し然るとも普軍の
先鋒隊疾風の落葉と巻く勢ひあるべ「バタイユ」が附属の小隊
二千人ゐど忽地斃るを号令官一人づゝ弾丸の為ゐ死し苦
戦極まるゐけるとも「バタイユ」奮激して撓まず追ッかゝッ

するうちゐ是もま〻手疵を負ひて陣すゐ破るんとする
時「レグンビル」の地ゐ陣どりなる「ゼ子ラアル」ビノアーグ軍隊く
り出し来りて休と見て一りさんゐ普の公子「シャルー」
グ軍ゐ攻かゝる「シャルーグ」兵隊新手の銃気ゐ當りがた
く旗色乱れて見えそうなり再説仏蘭西の左翼の方ハ
「ゼ子ラアル」ホルトン「ゼ子ラアル」フロサルら普の太子「フレデリ
ッキ」維廉「ゼ子ラアル」ステレメッスの隊と血戦すること二時間
余ゐして仏軍の戦威ハまます〻加そう普軍やうやくつゝれ
と生ど破んとゐるとゐ屢るもべ大将維廉副将「ステンメ
ッス」ゐど厳しく指揮して守返し守かゝるゐ苦戦し

ゝもど弾やくと打ちくゝた左翼ゐむうひゝ普の公子「フレデリッキ。シャルー諸とも終ゐ敗軍とゝ成うゝけり然るゐ仏軍の方も殆ど弾薬尽んとする故是と追討すると能ゝず「ゼ子ラアル、ホルトン「ゼ子ラアル。フロサルゞ兵隊らいその夜道路ゐ夜と明ゝ本営ようの弾薬運輸とまち居まう本日の合戦普軍十五万仏軍十二万合せて二十七万人の軍ゐゝて牛前十時頃ようゝ黄昏近くまゞの激闘るまゞ両軍討死手負とゐ大勢みうゝとなん

十八日「グレベロットと云ふ地ゐて普王の護衛軍と仏の総督「マレシャル。バセオンの兵隊と戦争ありてこの日普軍の討死まる〻多く其数一万千百十三人ゐ及ぶ仏軍ゝ十四日「グールセスの地の闘ひ十六日「ビオンビルの地の闘ひ今日この「グレベロットの地の三戦と合ゝて討死する者一万五千生虜らまる者或ひゝ手疵と負ひゝ者と合せて大約五万の数ゐ及ぶとなん方今普魯士の首都伯靈ゐ仏兵の囚虜となりて送らまゝしの四千人ゐ餘まう然まども普國の方ゝ今日まゞゐ討死するりの是ゐ倍ゝて駭ゞく実ゐ古来ようゝ名将の下ゐ立て軍陣ゐ莅めゞ命と落す者甚ざ多ゝとの譬へも當まるる普國第一等の全權宰相「ビスマルクゝ内外の事ゝる我ゞ方すようゝ出ゞ欧羅巴州中

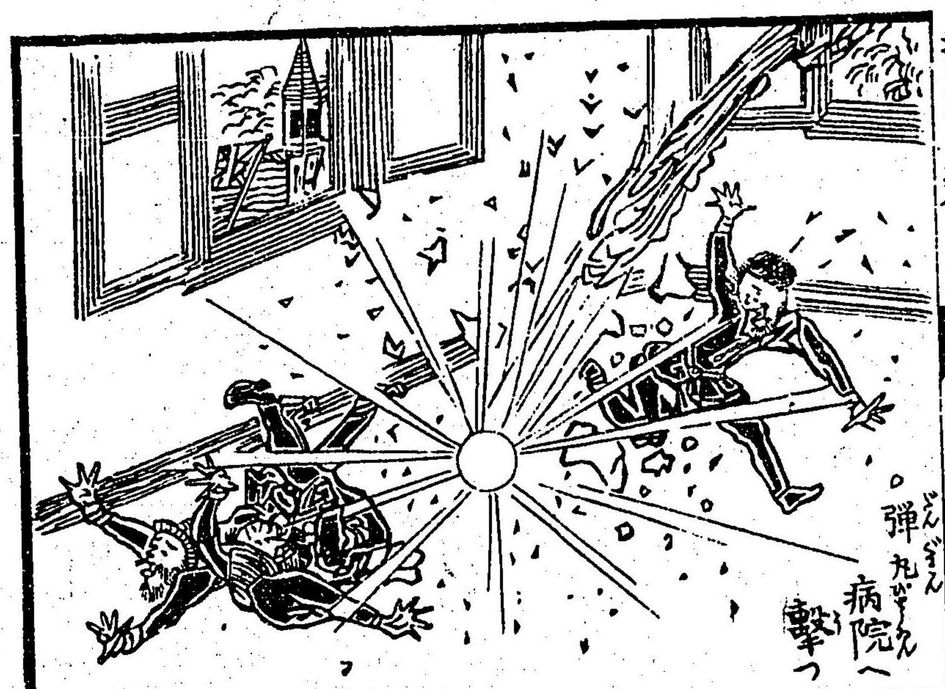
ことど弾やくと打ちくし左翼ゐむひし普の公子「フレデリッキ」シャルー諸とも終ゐ敗軍とゝ成りうけり然るゐ仏軍の方も殆ど弾薬尽んとする故是を追討するを能はず「ゼ子ラアル」ホルトン「ゼ子ラアル」プロサルグ兵隊らいそのまゝ道路ゐ夜と明し本営よりの弾薬運輸とまち居まり本日の合戦普軍十五万仏軍十二万合せて二十七万人の軍ゐして牛前十時頃より黄昏近くまでの激闘るまび両軍討死手負とゐ大勢なりしとなん

十八日「グレベロット」と云ふ地ゐて普王の護衛軍と仏の総督「マレシャル」バセオンの兵隊と戦争ありてこの日普軍の討死まる〻多く其数一万千百十三人ゐ及ぶ仏軍ハ十四日「グーレ」セスの地の闘ひ十六日「ビオンビル」の地の闘ひ今日この「グレベロット」の地の三戦を合して討死する者一万五千生虜らる者或ひハ手疵を負ひし者を合せて大約五万の数ゐ及ぶとなん方今普魯士の首都伯靈ゐ仏兵の囚虜となりて送らましりの四千人ゐ餘まり然まども普國の方ハ今日まで未ゐ討死するりの是ゐ倍して夥ぐく実ゐ古来より名将の下ゐ立て軍陣ゐ往めび命を落す者甚ざ多しとの壁言へも當まるる普國第一等の全權宰相「ビスマルク」ハ内外の事ゝる我ら方すら出で欧羅巴州中

ゆゑ二十年来の人材と称せらるゝ程なるべく軍陣ハ莅ミ人をして奮激させしむるの妙あるゆゑ普仏兵と合せくろうらるゝ三週の日を過さるゝ普兵の亡するを既ハ十五万ハ及ぶと云ふ日の戦争勝敗を決せず暮ハ至つて物分れとなろうゝ

同十九日普魯士王維廉ハ「レグンビルの傍らるる「ビワック縣」と本陣となり大元帥「ビスマルク」等となろう「メッス縣」の西の方ハ在陣なりる「マレシャル」バセーンゴ旗下の仏軍を撃んと大軍を起し急ハ襲撃ハあるべ朝九字より戦争始まろう闘ひ中どろハ至う仏軍大らハ震ひ奏ども

普軍ハ諸城より援兵を出すべき道を断切らるべ仏軍続く味方なく翌二十日ハ至り軍敗を竟ハ尽く「メッス城へぞ引揚ける夫より日々諸方ハ於て両軍兵を接るを間断なく普軍十八日よりの戦争討死極めて多し然ども仏軍を生虜とせし者を伯靈ハ送るを二千餘人内士官八十四人大将「ゼ子ラアル」プロンセンと云ふ者もの内ハ有りて送らるゝ二十五日普國の大将「ヲキス」侯三万餘人の兵を率ひて「ウエルジユム縣」を取りかゝ三百門の大炮を縣内へ向け均し連発なしけるゞ一弾九市中の病院へおちて破列し僕僮二人ゝゝ二人い傷を蒙りゝ爰ハ於て仏軍の大炮隊



および當市街の民兵ら大いに奮発勇戰して鬪ひ戸とんと三時間に至り両軍の死傷甚だ多く普の兵つひに敗北し辛くその場を引揚げ今日の戰爭當縣の市兵もつとも力を尽せとるべし

二十七日普國の首府伯靈より仏都巴黎斯を襲撃の兵と新たに十五万を操らし

来たり爰に於て兵四方をうち仏將「ゼ子ラアル」エリツクる者ゞ籠りる「ストラスブール縣」をかこませり抑當城の大將「エリツク」曩に其の地へ出張のとき仏都巴黎斯に於いて諸將に誓ひ「ストラスブール縣」は普國と仏國の境上にありてもつとも肝心の要地なれば固く守らずんゞ有るべからず然るとき今彼の縣の將帥となりて往敵何万の兵を以て攻るともよくことを守り城中に一兵士一弾丸あるうちは敢て縣を敵の手に渡すべからずと云へり斯の如くなれば防禦厳重のこるらず「メツス縣」より仏の総督「バセーン」「セダン縣」よりは先鋒総督「マクマオン」の両將より靡下の数隊を出して救はせけれ

普軍も攻撃の届うざるこを知り早く陣列を引あげうり

八月十八日より今廿七日まで十日の間の戦争ふ普魯士の軍中討死する者るりで多く日々の人員を左ふ記す

八月十八日　一万千百三十七人
同十八日より廿五日まで　四万二千三百八人
「ストラスブール縣ふて　一万千五百五人
「ハルスブール縣ふて　五千三百八人
「ウヱルジユム縣ふて　千三百八十五人
「ツール縣ふて　三千三百七人
「クールセルの戦争ふて　一万三千九百八人
「ヒユルサンレー、イートリー、ムーリンプーリーの地の戦争ふて　五千七百十四人
二十七日の戦争ふて　一万千二百九人
「コルフラレリーの戦争ふて　千四百人
廿八十日の間ふ陣中ふて病死るしる者　一万二千五百人

合計十一万九千五百八十一人ありこと云ふ

斯く猶日々くかーこふ攻撃ありて戦鬪劇烈を極めけるども両軍の死傷いまくあびでしー然るども普軍い戦ふ毎ふ進ミ仏陣い兵と接りるびふ逡巡せり

三十一日の朝「シャルスバト縣より仏帝の本営「セダン縣」へ進あり」と言るゆう一昨廿九日より昨三十日に至り當所の鉄道と以て普國軍隊を操り入りたるびゝ七十の蒸気車に何も八十の室を設け室毎に三十八人の兵士を乗せゝるべし人数二十一万二千八百人なり而して室毎に大字にて大急巴黎斯襲撃のゝため送輸すと記せり籤を押そゝうと是普國の謀臣「ビスマルク」が計略より出るところにて仏軍として恐怖をさしめんとする策なりゝとぞ

此時普國の軍隊いすでに「セダン縣」を往越して「カンシヤロンの近方まで攻こゝる隊ありけるゝ巴黎斯の府下と僅かに二三十里の距離なる故巴黎斯の町の富ゝる者い妻子とひき金貨と懐にして脱走するゝ多し爰に於て新聞日誌中にこと論じて今國土の危急にのぞゝ平常の恩義を顧りゝず他へ遁のき其危きを他人に譲り自己の家居と防がする徒多し斯の如きい如何なる法律にて制すべきや婦女童子老年い戦ひを避るも咎なるゝ男子に至りゝい身命を擲ち國恩を報ずべき時なるに富ゝるい財多ゝるに是を忘却し恥を忍びて走る者十に七八なり貪る者い去るを能ゝざるゝ却て防禦に其身を委ぬ此両條に於ける處置すべき良法あらん方

今危急ふ莅こ家を棄て去る者い其家を戰士の下宿と
る一且疵人の兵士ふ代貸一與ふべきそう
「ウエルサイル縣ふ於くふ既ふ脱走の徒ふ令して曰
國土の為ふ身命を惜こく脱走する輩い家居を明渡一
身命を代りとして是を戰士ふ供すべー
巴黎斯府もまた同ど今ふ危難ふ莅こ國家の為ふ身命を
擲こんとする者い眞の男子なるを以宜しく是を尊び重んず
べー依りて脱走の徒の家居を没入一兵士ふ給する事ふ於て
可なりとあうん曩ふ巴黎斯の防禦を願ひ出る民兵と悉
く其家居ふ宿陣せーむべー故ふ去むと欲する者い速うふ

去を其家居い凡て報國の兵
士ふ給するそうと
蓋巴黎斯防戰の勢ひせまり
富者いこる金銀を携へ持て
危難を避んと遠く他邦ふ移
まり然るを諸郡縣よりして
府内防禦のため民兵を出一
来まりその勢ひ齟齬を以
て其論説を起せりとぞ
再説両軍切迫一いよ〳〵鬪争劇

烈ふく炮声日々四境ふ裏き銃煙朝暮天を掩へり斯の如くるまぐ廿八日より三十日まて三日の連戦ふ普の兵討死する者九万仏ふてい総督「マクマオン手疵とあひ是まゝ兵士を多く損ぜり

三十一日普の陣より仏の営へ軍使を送りて二十四時の間休戦し以連日の戦争ふ死傷せし兵士の取片付るゝと請こと仏の総督「マクマオン是と許さず直ちふ使者を追返せり「マクマオンい我が旗下の軍士十二万人ふ過ざると以て敵ふ當るふ足らざるまぐ「メツス縣ふ拠こりざる右翼の総督「マレシヤルバセーンと一手ふ成り普の大軍を撃破らんと策畧すぐふ決せりところ忽地斥候隊より急報ありて普國の太子「フレデリツキ。シヤル、三十餘万の兵を率ひて既ふ押寄せ来まりと成らけまぐ「マクマオンい敵の進撃すゝやるふ驚き早く近方なる要所〻ふ兵を配り是を防ぐんとぞ成りける抑「セダン縣の前面ふあいて第一の要害とるところい「マルヘーと呼る一の深林なり故ふ仏軍ーこの地ふ據り普軍を伐んとるーこるふ普の元帥「ビスマルクい豫て是を計り知ることりて太子「シヤルゝふ示して早く樹森の要所を取りきらせ大炮七十門を配りこり爰ふ於て「マクマオシい「メツス縣の兵とも合併るせず又「マル

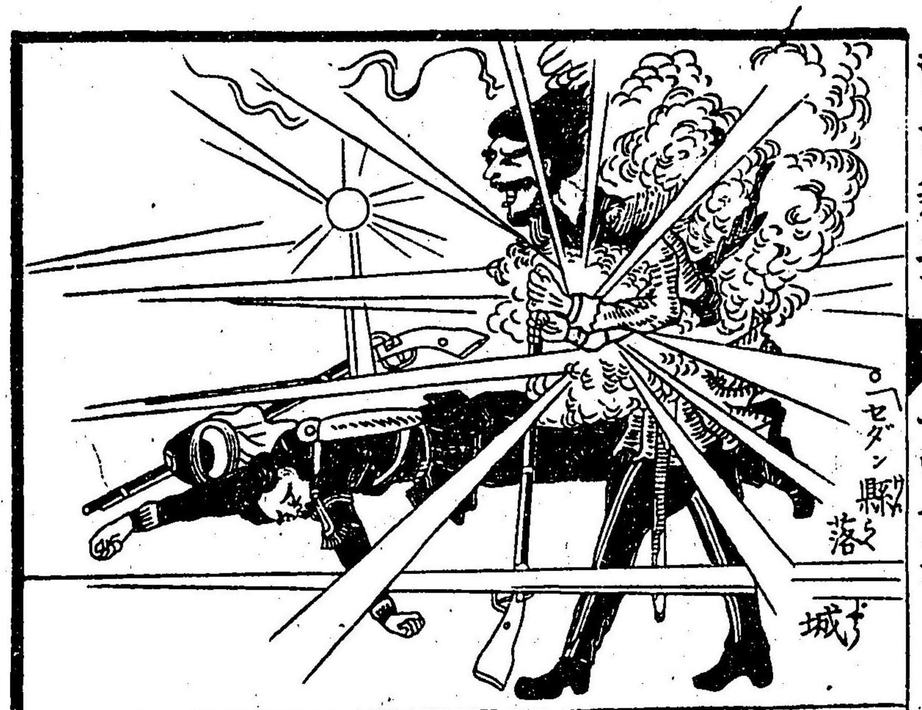
〳〵の樹林の要所も取と策畧二ツるぐら失〳〵ども勇気抜群の老将なれど少しも屈する色なく敵寄せ来らば微塵ふるさんと大小炮の巣口をそろへ打鉄あげて待ける

九月一日朝第五時普軍果して攻け来り早炮発とる故仏軍も是と迎へ戦争ぶ劇烈となり十一時のころふ至り仏軍鋭気盛んとなり普軍敗走すると頻りなり然ども数回守りうへ蹟止まりて苦戦ふ及ぶ仏軍い普の兵と「ツウル縣近くまで追戻せるの勢ひふ乗じ普の太子「シヤル〳〵の本陣と衝破り続いて「マルヘーの要害と取り戻さんと是と追と最急なり時ふ真黒ふ粧ひる一軍勢ひ疾風の如く仏の左翼の脇備へ撃入りるいこと普の太子「シヤル〳〵の一軍ふして太子「シヤル〳〵先鋒の味方破と〳〵と聞き是と救ん〳〵と兵八万と引き爰ふ駈着るもの然ども味方の助けと得て今まで逃る普の前軍一時ふ取て返して伐かること最烈し仏軍い左翼と前面と敵とうけ従来人数も少なく且彼の「マルヘーの森の中より劇射する大炮夥ぐさ故忽ち苦戦と成りるとど「マクマオン指揮して隊と正面と左翼ふ目ち戦力なれ暫時い撓まざるぐ普軍い新手なく仏軍い應援の兵乏しければ遂

ふ前面左翼とも伐やぶらと散々ふ「セダン」縣の城堡の中へ引退きて揩籠まろ爰ふ於て普の兵い外郭ふある市街炮臺要所ゝと取りきろ城の四方と押ー圍ありこの日の戰爭猛烈のうちの猛烈ふて始め普の一軍二万四千の隊列るりしが一瞬の間ふ打斃さと生るりの僅ふ一百八人とぞ

再説普國の太子「フレデリッキ」シャルゝい三十万の大兵と以て「セダン」縣の八方より鉄捕の如く取りこゝ城内へ向けて無數の大炮と打ケゝろ城兵もまゝ是ふ應じ防戰堅固ふ見えゝろろ

同二日寄手の普軍まゝ加ろ大砲の弾丸城中へ飛散するとりゝ烈ゝ廿日い十一時間ふ丸數六千餘ろふ及ぶ然まび瞬くひま息つ間さえ陸続とて市街の家居と劇射するゆゑ其裏き百千の雷霆の如く天地とて震動るさゝむまび今や城中の仏軍こまろ為ふ皆尽く打斃さと微塵ふ成りて死すべくゝえろ然まど軍將「マクマオン」い勇気凛々ゝて撓まず防戰の指揮るふ厳重るりゝ一弾丸かゝろふ落飛散ゝて「マクマオン」ど右の腰骨と打碎けろ然まとも「マクマオン」未ざ死ふ至らず衆人ゝゝ是と扶け炮丸遠きとろまぐ搔き荷ひてぞ退ぞきける



仏蘭西の軍將「マレシヤル」マクマオンい左翼隊の総督として兼て先鋒と兼まそう右翼隊の総督「マレシヤル」バセーレと二軍ハ別を居り仏國陣中の指揮い皆この両將より出る処なり「マクマオンい是まで数度戦功をあらはしる有名強武の老將ふて此時六十二歳と云ふ

「マクマオン」斯重手を負ふ「ゼ子ラアル」ウインホン是ハ代りて左翼総督の任を継ぎ防禦の戦術を尽しそう然ども此籠城普軍の進撃迅速なるハあひ事急ハ出と まだ他より運送の諸物を當ハー何の蓄へもなー置ざる 此日午後三時ごろより弾薬乏しく同三日ハ至りて食糧の蒸餅すでハ尽そう加之軍卒の死傷ハとんど十五万ハ近けまだ仏帝始め諸大將も力屈ー勇気 兵士い労まて闘ふべき勢ひ挫け只弾丸の的とあり死を待の外なき体なまだ最ども是まで城中より休兵の白旗を出ーそう普國の軍中ハとんて急

ふ攻口の発炮を止め頓て城内へ使節をもつて云せけるは仏帝
拿破崙今その将卒と倶ふ城内を出て我が軍と闘ふひと
まづへ爰ふ雌雄を決するう或ひは速うふ城を開いて陣門ふ来
り囚虜ふ就う二ツの中と何をとも返答あるべし蓋その評
議も有るべけれども今ようこの二十四時間を待ものうとい事
夕六時あぞありける
二十四時間ハ一日一夜なり
同七時仏帝拿破崙こうう一書を認めて普王フレデリッキ。
キヨウムふ贈まつり其文ふ曰
軍破れ力尽るも余陣頭ふ死するを能はず因うて佩刀

を脱して與ふるふらざるト
此降書普軍の本陣ふ達しるとも普王キヨウムより返翰を送れり其文ふ曰
法帝いまの度の軍陣中兵士の指揮を司らざるふ因り其剣を與へるの謂なり只

身を投じて囚虜に就くべきものと

翌朝七時仏蘭西皇帝拿破崙第三世および左翼の総督ゼ子ラアル、ウインホンゼ子ラアル、シンフリユン、ヘリキストウエー始めとして総軍四万人普國の太子フレデリツキ、シヤルゝグ軍門に降き囚虜ふことを着くるを時に千八百七十一年今より三年前の九月四日の事なり爰に有りる爰に普軍の兵士ら我先にと城中へ込み入り仏國の旌旗大小砲および

ミトライスの大炮或ひい馬金銀諸財手當り次第奪ひ掠め縣内乱暴狼藉くるい戦場の常とは目も當られぬ有さまなり三日の連戦に普軍の兵士死傷せしも六万餘人に及ぶと云ふ

此度の戦争始まりてより今日まで仏軍の普國へ囚虜となりし者八万餘人に至れりとぞ

仏帝ちゞ〳〵破を頻りに遂巡すること早く巴黎斯に退ぎき全國の兵士を募り普國の兵と戦ひを決し猶敗するに及ぶ其後に至り本城に據りて敵を引請んと

当然なり然るに要害あさまなる「セダン」縣にありて遂に敵軍の手に陥り囚虜となるい何事ぞ是い故とは抑此度の戦争素より帝一已の方寸より出て強に戦ひを求め期に臨むのぞと数回廟算をしるひ軍破れ人多く死すること是ゞなるに其父子兄弟と殺さるゝの哉

万人とゆふ数を知らす然して敵軍本城ゆ迫らんと
し仏國存亡の機ゆ莅みしい全く帝の呼ゆ応ふして衆
人の深く恨めるとそろる故ゆ帝敗兵をひして巴黎
斯ゆ帰らゞ府下の人民うち寄りてかるらず帝を
殺すべし仏國の者ゆ二種の區別あり一種い帝を憎
み一種い帝を佐く然るとゆ一挙ゆより二種あひ合して
帝を恨み罵る其声街衢ゆ充くり実ゆ億兆の離心
まく如何とも策なし帝も明らゆの事情を知りて
巴黎斯ゆ帰らず「セダン」縣ゆ在りてかく囚虜ゆつ
きくり嗟拿破崙平民の中より我が一身の智勇を

以て仏蘭西皇帝の位ゆ昇り外い隣國と闘つて勇威
を遠近ゆ奮ひ内い政權を掌中ゆ握りて全國を按撫し
芳名欧羅巴ゆ裏くて既ゆ十八年今晩年ゆあるんで英
武全く地ゆ墮くり惜いる
「セダン」縣落城帝拿破崙普軍の囚虜ゆ着くりと聞え
けるゞ仏都巴黎斯の議事院ゆありて総宰職「ゼ子ラア
ル」ドロシユ「ゼ子ラアル」ジユンパーブルるゞ云へる者を始めとして
諸全權の人々評論るし立君を廃し今日より改めて國を
共和政度とるすとと一決しけるゞ即市街へ布令を
出せり其文ゆ曰

仏國人民よ嗚呼我ゞ邦実ふ大不幸ふ遇りらの三日の間烈ーき大戦争ふかゝび左将「マクマオン」敵軍三十万と血戦数合ふるゞび「マクマオン」重創を蒙り「ゼ子ラアル」ウインホン是ふ代ると雖も我ゞ軍竟ふ破ぶ「セダン」縣落城ーく拿破崙「ウインホン」を始め四万の将卒こゝを敵の囚虜とあらゝ今や即巴黎斯防戦の秋来りれゞ全國の人民心を協せ力を戮らーて自主自立を永く謀らずんば有るべからざるのたゝ

一今日より共和の政度ふ改む仍て以来内外の事務尽く共和政堂ふ於て決議裁定す可ー

一千八百七十年九月四日

共和政度ふ因て新規ふ撰み挙らるゝ諸全權十一名あり順序左の如ー

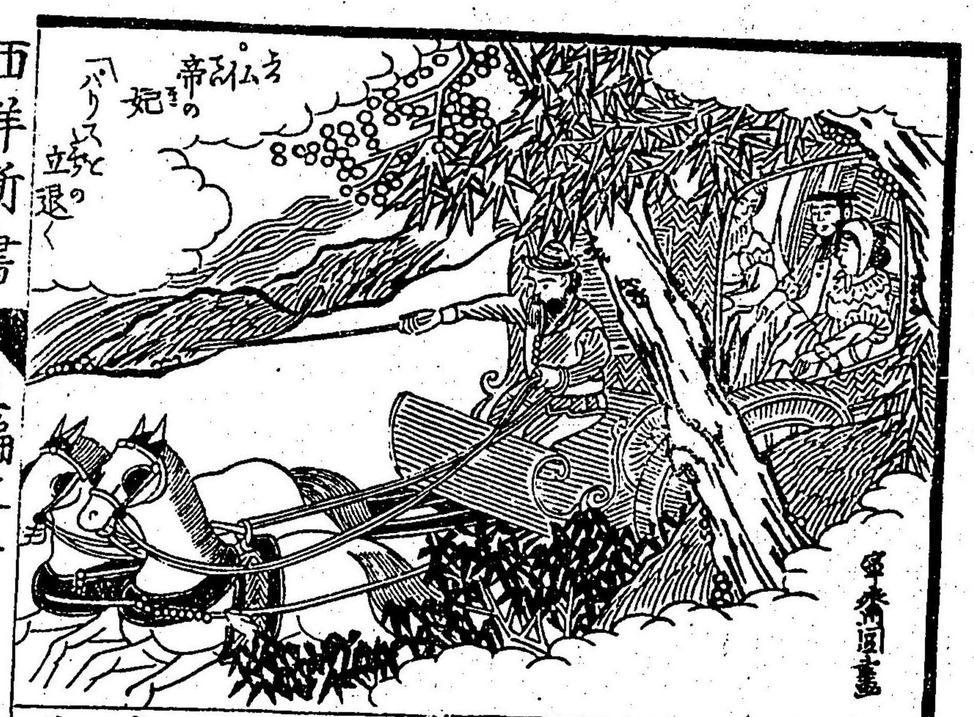
共和政堂諸全權

大統領兼巴黎斯府総裁職　「ゼ子ラアル」ドロシユ
副統領兼外務全權　「ジユルバーブル」
内務全權　「ガンベタ」
會計全權　「ユル子スト」ビカルド
教導全權　「ジユレー」シモン
裁判局内政全權　「クレミユース」
軍務全權　「ゼ子ラアル」ルフロー

海軍全權
通商及司農全權
諸職工技全權
巴黎府市街督務官

水師提督「フーリション
「マグニン
「ドリアン
「ケラトリー。アラゴ

此日政府の命を請て拿破崙ゞ后妃の親族なる「レッサンと云へる者城内の「チユルリー宮へ往き拿破崙の后妃ふ謁して爵位と剝ぎ刪るの書を呈しけもど后妃ハ是を受らとらふ花押の書を渡せり斯て午後一時半后妃ハ一車ふ乗り侍婢一人僕二人を従へ城内を立退きゝらしゞタ七時比耳義國の都府比律悉ふ着せりとなん昨日まで此后妃假りふも



全國の政務を預りらしを今日ハ退城して他國へ去るその様獨婦の姿なり人世の浮沈実ふ歎ずべし然るを后妃ゞ退去の体をなんとそ老若男女辻々ふ群集せう又市中の往来ふハ数百人の若者ら黨を結び連をゝ戈群とゝ共和政と記しる大旗を押し立て大音声ふて共和政とゝらゝる喜びの歌を唄ひ立君

の矩と廃し帝と敵の手ふ棄てると祝し歩行り其中ふもけぞど編成すゝる市兵隊ら市中と巡邏するふ手銃の先へ木の葉或ひい草花とうと付け同音ふ歌と謡ひ道路中と横行るしぬ又巴黎斯の府下ふてい家毎ふ國帝の顔面容貌と繪ぎゝる金地の額面とけゝう是と入り口の飾とし門の上ふ懸ゝう然ると共和政度の布令と聞とひゝく俄ふとゝと下しく悉く打碎き或ひい微塵とるして捨ゝる門外ふ立て祝せび往来通行の者も共和の政度と賀し相倶ふ悦び笑ふ声戸ふ溢と衢ふ充ち如何るる嬉しきとの如く市街是ぐるふ騒然ゝう人心の離と乖ると斯の如く甚ぐし是仏軍

の戦ひふ敗し拿破崙まゝ囚虜とる源因すり巴黎斯の人民立君の則と廃し共和政度とるると宜とし今この危急ふ莅んで祝賀の声の喧々ゝるい奚ぞや新と好み奇と愛す奢りの癖と拿破崙と棄べ共和の力と以て頓ふ普軍ふち勝んと必然と心ふ誇るとゝろあると以てすり古語ふ云ふ軍陣ふ莅んで驕り誇るものい勝ずと仏國終ふ普國ふ降り威名全く地ふ墮る基本も又こゝと爰ふあるゝ

或人云り拿破崙昨日まで仏國の皇帝ゝう諸人恩ふ俗する

E既ふ十八年間の久しきと経然るふ力尽きと運極りて今敵の為ふ囚虜と成るふ及び國民ととと棄て離と返すの心

のこるうず却て祝賀の声を発し俄ふ入り口の飾りとせ帝の像をうち破る其所為恰も狂人の如く其意全く讎敵とんるふ似うう乱離爰ふ至る而して國人の心敵軍ふ對し毫も慙る色ささふ齊し豈慨嘆すべうらざらんやト

再説巴黎斯の府内ふくふ日々籠城の准備ふて便利よき村々うう

麺包野菜を運び入れまゝ郊外の牛羊を昼夜ともうず引込食糧の茎田へするのみなれば合藥を製し弾丸を熬て防禦の手當する人あり家財を荷ひ諸具をうげ老幼を迯し婦女を避させまゝ若冠の男子らい脆を撫り足蹻るら家居の出入り繁ければ道往人も自ら歩行せりゝき其中を非常ふ備る巡羅の兵卒ゝ絶ず往来るれば府内の混雑云んうたう

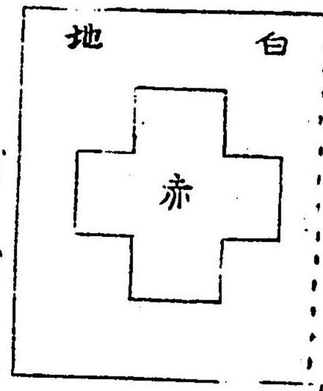
同九日ふ至り巴黎斯府外の十七城防禦の備へ整ひうる故その湟へ水を灌ぎ湛へさすると以て今朝より市中の水路一切絶うう

以日瑞士國の人

瑞士ハ仏蘭西日耳曼以太里の三大國ふ狭りうる一小國るう

自國の壯士を募りて一隊を組み仏國の政府に請て云ふ余が輩等數年巴黎斯の府内に住し今日の形勢に至りしを傍觀するに忍びず然れども我國中立を守るべ何もの國にも應援せざるの約あり爰を以て砲臺の上に立て敵と戰ふあるべし故に此の防戰中巴黎斯府市中の火災を防ぎ或ひい兵士の手負へる者を助け是を病院に舁荷ひて往べけるべ其役に任ずべしと云ふ親因救援隊と号け巴黎斯府に在住する各國の人々社を結んで病院を設けることを救助する隊を組こゝに亜米理加人い別に一個の力を以て病院を營み本國の印しの旗を建て軍中病院と号せる館を設けゝ

蓋病院その外手負の者を止宿する家に各標的を付て白地に赤く十を染出しゝる旗を建置るゝ此旗あるべ敵府内に乱入するとも其家へ對ひて発炮るさること千八百六十四年八月二十四日瑞士國ゼネーブ縣にて歐羅巴各國會議盟約五個條の内の一ゝりとぞ



○病院標的の旗

同十三日敵軍次第に切迫の住進ありけるべ巴黎斯防禦の為

諸方より走集りたる市兵の隊伍と今日大統領点撿あるを以て市兵隊悉く巴黎斯市中なる大道の左右に列を組み其長さ大約一里にして立さるところの銃剣恰も稻麻竹葦の如し午後十二字半総裁職巡見として来る前駆の騎馬数十人次に「ゼ子ラアル」「ルフロー」「ゼ子ラアル」「タミシエ」「ラアル」「ドロシユ」及び軍務宰相「ゼ子ラアル」「ルフロー」「ゼ子ラアル」「タミシエ」「ラアル」其他数多の大将列を連ねて打せ少し後に騎兵数十人続き大道の左右に居るらぶ市兵の前へ総裁職来るときは各冠りを採りて礼し総督の名を高声に呼ぶときは総督も冠りに手を懸て礼を返す今巡見を受る市兵は三十餘万人なりまた別に「ガルドモビル」と号し民兵十万あり是は「シヤンゼリセー」と云る地の

大道に列を連ねし二市兵合して四十万の大軍なるべし流石に廣き巴黎斯の市街へ猶居あまりて足えざるゆへ今日「コンコルド」と云る町にて水師提督「ゲレー」なる者市兵隊を巡見せしに大隊の六番小隊中に鑽石を以て作りし銀の勲功牌を胸に懸る市兵あり西洋各國共将帥なるもの勲功あるべ帝王なり其時の手柄と

記しる牌を賜ひ朐の上ふ懸しむ是を勲功牌と号く
水師提督近よりて見るふ前の教導全權宰相「ジユリユー」と云ふ
者あり「けまべ」提督「ヒヒふ」謂足下いは大隊総督なるべーと「ジユリ
ユー」答て云ふ余い歩卒なると當然なり大隊指揮の任い前ふ
歩卒なりし者ふあり方今遂ふ余ふ勝まり水師提督ふ
ゝび云ふ嗟美なる近きふ城郭寨砦の上ふ於て再會すべーと「ジユリ
ユー」云ふ然りとも我徒が今日の任あり五ひふ其勇と寨砦の朐
壁上ふ於て顕すべート此両士が問答時ふ當つて勇しからずや

西洋新書五編下終

西洋新書満備まて稿既ふ成續て出版

官許　明治五壬申年仲春

東京書林　大和屋喜兵衛藤兄

橋本玉翁畫

梅村宣和蔵梓

戸生政和編輯